

琴坂将広研究会 2025年冬季合宿成果報告書

(C) 研究合宿・研究会が主体となった学術交流活動

活動期間: 2月1日～2月3日

活動場所: 軽井沢プリンスホテルウェスト

【活動概要】

琴坂将広研究会では、琴坂教授とゼミ生が共同でスタートアップの創業、成長、国際化についての知見を蓄積すると同時に、その蓄積した知見を広く社会に還元することを目的として活動している。冬季合宿では、ゼミ活動の集大成である卒業論文の発表会と学生実務家による事業相談会を行った。また、「経営戦略原論(琴坂将広 著)」の特別授業も開催した。合宿形式をとることにより、フィードバックの時間を多く確保できた。後輩にとっても、卒業論文のイメージを共有することで、学習意欲向上に繋がる良い機会となった。実務家の発表では、事業で抱える課題を琴坂教授・ゼミ生に直接相談することで、研究会の目的である蓄積した知見の共有を果たした。また、普段呼び出すことのできないOBOGをお招きし、各フィードバックをいただくと共に、ゼミ生の進路や学習内容について忌憚なきアドバイスをいただいた。

【プログラム詳細】

1. 卒業論文発表会

本年度、卒業する4年生3名による卒業論文の発表会を行った。

当研究会では、国際経営、アントレプレナーシップ、経営戦略の3つの領域に関連する研究を行っている。一方、琴坂研究会以外で卒業論文を書くゼミ生も在籍しており、研究領域×経営の視点から多くの知見をゼミ内に共有する場の創出を目指している。それらの研究に対し国内外で活躍するOBに研究成果の報告やフィードバックを頂けたことは極めて貴重な機会だったと言える。

1つ目の研究発表の題目は、「起業家のストレス対処と回復体験」である。当研究は、ASA理論を元にした起業家のストレスレベルの低いという定説は生存者バイアスによるものだとしリサーチクエスチョンを設定している。アーリー期・シード期の起業家を対象に定性的調査を行っており、社会資本の量とストレス耐性に相関関係があるとした。組織論の文脈も豊富であり、現役の実務家が多く所属する当研究会において、非常に価値のあるものとなった。2つ目は、アフリカにおけるラグジュアリーブランドについてである。アフリカでアパレル事業を行うゼミ生による事業紹介を主軸とした発表であった。今まで、アフリカでのオリジナルブランドを手掛けてきたが、ラグジュアリーブランド路線に変更しビジネスモデルのピボット案について紹介した。自身の起業経験を活かした貴重な論文発表となった。3つ目は、「A 25-Year Journey of Companies on Japan's Emerging Markets: Insights from Their Board Composition at IPO」という題目で、ベンチャー白書の取締役データを活用した調査となっている。当研究は、日本のスタートアップ市場の変遷と、取締役会の構成がIPOに与える影響を明らかにした点で大変意義深いものとなった。

発表は、日本語・英語で行われ、両ゼミ(日本語クラス・英語クラス)から質疑応答が行われた。卒業論文の仕上げの前に合宿を行うことができ、有意義な時間にすることができた。

図1は、4年生による発表会の様子である。図2は、OBOGからフィードバックを受けている様子である。



図1 卒業論文発表会の様子



図2 OBOGによる相談会

2.事業相談会

琴坂研究会では、現役の実務家も在籍しており、自身の事業を相談する場として事業相談会の時間を設けた。琴坂教授からは、今後の経営戦略についてコメントをいただき、経営者としての意思決定についてアドバイスをいただいた。また、ゼミ生やOBOGのバックグラウンドや専門領域からの鋭い質疑応答があり、事業を再考する時間となった。また、ゼミ生は同世代で活躍する実務家の経験や悩みを学びに変えられる大変貴重な時間となった。



図3 事業相談会

【経営戦略原論 特別講義】

琴坂将広教授が2018年に出版した「経営戦略原論」の第2弾を2025年に執筆する。第2弾の構成について、琴坂教授とゼミ生間でディスカッションを行った。第2弾は、実務家をメインターゲットとしているため、今求められている理論やケーススタディなどをまとめた。

ゼミ生同士、興味分野を共有することができ、親睦を深める良い時間となった。また、この議論を通して教授が本を出版することで、理論を理論で終わらせない琴坂研究会を体現できる。

【謝辞】

この度は、慶應SFC学会の研究助成金Cを受けて実施することができた。助成金をいただいたことで、多くのゼミ生の参加を促すことができ、会場を借りて本格的な発表会を開催することができた。本合宿では、研究の向上だけではなく寝食を共にすることで、学生間・教員と学生間の仲を深められ、今後のゼミ運営に欠かせない貴重な体験となった。改めて、慶應SFC学会には感謝申し上げます。